

活動名	団体名 広島市立大学都市ギャラリープロジェクトチーム
都市ギャラリープロジェクト	地域 広島県広島市
	代表者 准教授 金 泰旭
	支援金額 25万円
活動概要	
<p>本プロジェクトは様々なアクターを巻き込みながら芸術空間を創造し、地域活性化を図ることを目的とする。同時に、国際性をも取り込んだ事業運営を目指している。</p> <p>今回は目的達成手段として、広島駅新幹線口に設置されている工事現場の仮囲いを活用してアートを施した。ワークショップを通じて真の活性化、草の根からの国際交流を達成できたのではないかと感じる。同時に、ワークショップ対象者に環境問題、地域活性化に対して考える機会を提供できた。</p>	
<p>◆実施場所：広島駅新幹線口前に設置された仮囲い</p> <p>◆参加人数：広島市立荒神町小学校、広島市立尾長小学校、社会福祉法人寿老園老人ホーム、二葉公民館日本画グループ「遊」、東広島市河内中学校美術部、広島市立城山北中学校美術部、広島市立古田中学校美術部、広島市立東原中学校美術部、韓国・ソウル啓星小学校、西京大学</p>	
参加総人員 425名	



《作品全体図》



《みどりの家といきものキャラバン》



《小学校でのワークショップ》



《中学校でのワークショップ》

◆実施に伴う効果

小学生対象のワークショップでは、「住み良い街とはどのような街なのか」というテーマのもとに、同時にその実現の為には何をすればいいのかを考えてもらいながら子供たちに作品作りを行ってもらった。

後に実施したアンケート結果からは「ゴミのない街にしたい」「これからは分別をし、無駄使いをやめようと思った」といったような意見を得ることができた。このようなことから、彼らに環境問題を提起した教育プログラムを提示できたと考える。

また小学生以外の地域住民にもワークショップの感想を聞いてみたところ、「地域活性化に対する意識が高まった」「地域活性化を目指す活動に関わることができてうれしい」という声を多数頂き、地域活性化について考える機会を提供できたと考えられる。

◆苦労した点

本プロジェクトチームが直面した苦労した点として3点が挙げられる。

まず1点目、一番難色を示したのは、やはり作品作りにあたっての資金調達である。プロジェクトの趣旨に賛同して下さる企業になかなか巡り会えなかった時期もあり、時には何時間も叱責を受けたこともあった。協賛金を集めることは、当たり前ではあるが生易しいことではないと痛感した。

2点目は、小学校に対するアプローチ方法である。学校に授業の一環としてワークショップを組み込んでもらうことが意味する先には、学校に対する確然とした説明責任が生じるということである。また保護者の方に配慮したアプローチ方法をとる必要がある為、試行錯誤しながら何度も調整のために小学校に通った。またワークショップ時も整然たる手順で進めていかなければいけないという緊迫した状況の中で行われた。更に、決められたカリキュラムが存在する教育機関の中で我々のプロジェクトをどのように関連付けるかについて苦労した。

3点目は、いかに一般の人々に作品コンセプトを理解してもらうか、という策を練ることに悩まされたことである。今回私たちが目指すのが‘パブリックアート’であったため、仮囲いの前を通る不特定多数の人に作品を理解していただく必要があった。しかし通行人にアンケートをとったところ、作品コンセプトの理解がされていないと思われる回答も見受けられた為、自己満足だけの作品製作で終わらせないアイデアを出すことの難しさを認識した。

◆今後の課題・発展の方向性

前回に引き続き、現在都市ギャラリープロジェクトの第2弾を実施中である。その際に第1弾の反省点、課題点を克服しながら展開を行っていくと試みている最中である。課題点は上記に示したように、作品内容(作品の意味するメッセージ)を多数の人々に理解してもらえるようにする点である。また、メディアを利用しての外部に対する広報をいかに上手く行っていくかも、課題の一つとして挙げられる。また前回は、地域住民と海外住民の間で直接コミュニケーションを図ることができなかった。そこで、今回はワークショップを行う際に地域・海外住民が互いの感性を共有できるように作品制作のプロセスを工夫する。

「街の中心部から活性化」することを目標に、前回の広島駅新幹線口前に引き続き、今回は広島の‘へそ’ともいえる紙屋町でプロジェクトの実施に臨んでいる。この場所は広島の人だけではなく、海外から訪れる観光客の人も必ず訪れる場所といつても過言ではない為、さらなる話題性及び活性化の波及効果を生み出せることが期待できる。

◆活動を終えての感想・意見等

1つのプロジェクトを成し遂げることがどんなに至難なことであるのか、を認識した。

また、このプロジェクトは、「私たちだけでは決して遂行できるものではなく、様々な人々の協力の上に成り立っている」という大きな実感を得ることができた。

最後になったが、本プロジェクトの実行にあたり助成をして下さった貴財団に深く感謝を申し上げたい。